

図2 秋篠寺凶徒等狼藉注文
「茶園」表記部分(○囲み)¹⁾

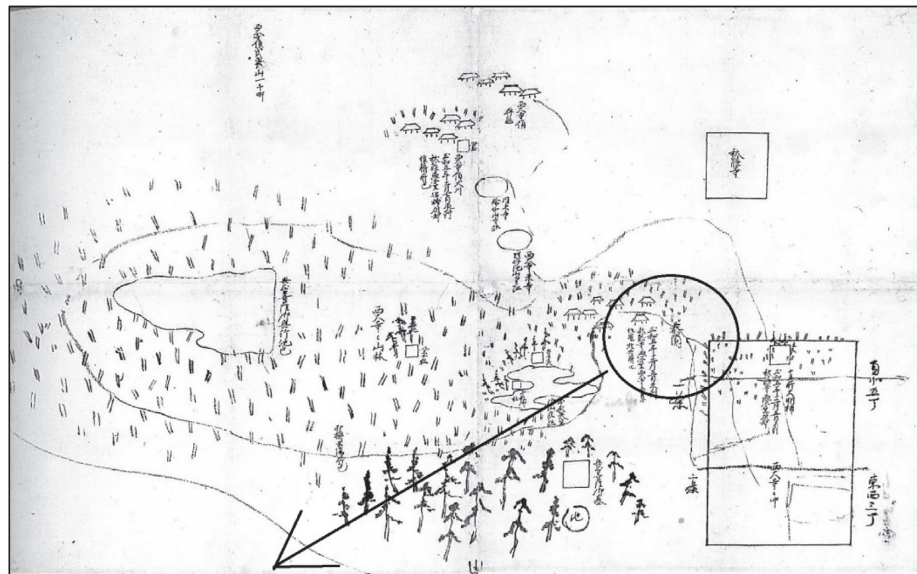


図3 西大寺与秋篠寺界相論絵図
「茶園」表記部分(○囲み拡大が左下図)²⁾



在のところ奈良県で最も古い茶園を記す文書がある(図2)。それは、正和6年(1317)に西大寺と秋篠寺の間で起こった境界争いの際につくられたものである(図3)。文書の年号は文保元年であるが、正和6年に改元されて文保となるので同じ年のことである。この中で西大寺側は、極楽寺開山長老(忍性の事)が植えた茶園を秋篠寺に荒らされたことを訴えており、叡尊に続いた忍性も西大寺に茶を植栽していたことが示されている。

また、同じ件に関して作成されたとき

れる莊園絵図には叡尊の墓所近くに茶園の表示があり、これも絵図に表された茶園の最も古いものとされている(図3)。

その後、西大寺影響下の寺院での茶製造は見られるが、西大寺自身での茶生産は不明となる。ただ、江戸時代初期の元和元年(1615)のこものなりちよう注⁶⁾に西大寺村、秋篠寺村がともに茶役を課されていることから、この時期まで茶の生産が続いていたと思われる。

このように西大寺は、興正菩薩・叡尊の「儲茶」にみられるように、中世における日本茶の栽培や消費拡大に関する中心地であり、茶園の出現する最古の莊園絵図が伝来し、茶の生産を示す古文書も残る。また、現存する茶産地の多くも、その発生期に忍性ら律僧の指導や影響を受けたと考えられる。

2-2 元興寺

猿沢の池の南にある旧奈良市役所(現在のならまちセンター)前の道を、さらに数分南に下ると、元興寺極楽坊の正門前が出る(図4)。

元興寺は、明日香に日本で初めて建立された寺院である「飛鳥寺」が、平城遷都に伴って現在地に移転した寺であり、南都七大寺のひとつとして国を代表する寺院であった。しかし、都が奈良を離れると、漸次衰退して、かつての境内を保持できなくなった。そして、元興寺の旧境内地は、中世以降に市街化がはじまり、「元興寺郷」を形成し、現在の「奈良町」に至っている。

また、この一帯は古都奈良の文化財として世界遺産にも登録されている。旧堂舎は、「極楽坊」「小塔院」「小子坊」などを中心に民衆の寺として残っており、特に、極楽坊に

使用されている瓦は、飛鳥時代から近世のものまでが混在することで有名である(図5)。

鎌倉時代になると、元興寺は勃興した西大寺の律宗の影響を受け、現在の宗旨である真言律宗となってゆく基礎ができあがる。

元興寺は町中に位置したせいか、茶産地としての呼び名はないが、『経覚私要抄』^{注7)}や『大乘院寺社雑事記』^{注8)}によると、茶の上納や茶園管理に関与していたと思われる。

まず、『経覚私要抄』には、宝徳3年(1451)2月の条に「八峯山茶菌」の掃除を元興寺領の人夫に命じたことや、この作業が数日にわたって行われた様子が記されており、同様の記事が享徳2年(1453)の2月にも見られることから、作業が年中行事となっていたことが推定される。このことは、茶園管理に堪能な人材が、元興寺郷に所属していたことを示しており、元興寺に茶業技術者が発生していたのではないと思われる。

次に、『大乘院寺社雑事記』^{注8)}では、長祿2年(1458)から8回にわたって新茶を進上しており、その時期も3月から4月に限られている。これは、新茶製造直後の進上となり、商人からの購入品ではなく、元興寺自身が茶園を所持し、茶の製造を行っていた結果ではでないと思われる。

さらに、中世の茶の普及において重要な役割を持つものに「闘茶」がある。これは、出された茶を飲み当てるゲームであるが、色々なやり方が考案された。その基本となるのが「四種茶」で、これは4種類の茶を持ち寄り、それを飲み当てるのである。これを10回繰り返して勝負するのが十服勝負であり、多い時には百服に及ぶこともある。この時、実際に飲むのは3服で、一つは飲まずに判断を行い、この茶のことを「客」または客の字がウ冠なので「ウ」と表現する。図6に見られる「ウ」の字がそれである。

闘茶の記録は、14世紀に各種の日記類にあらわれ、実際の結果表が現存しはじめる。元興寺に伝来する「三種一客七所勝負事」(図6)は、仮名暦の料紙から応永14年(1407)頃と推定され、現在知られる「四種茶」の闘茶会記録としては、15世紀初頭の古い部類にはいる貴重な文書資料であり、元興寺と茶が密接な関係を持っていたことを物語っている。



図4 元興寺付近



図5 元興寺極楽坊の屋根瓦

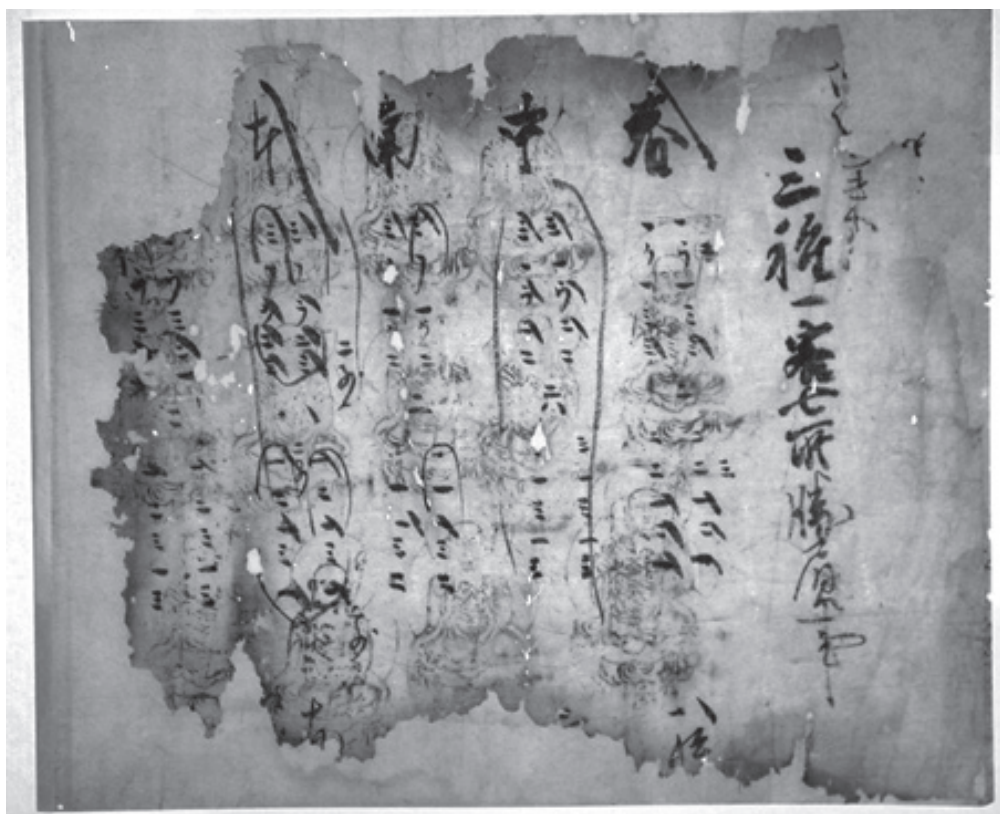


図6 三種一客七所勝負事³⁾

2-3 称名寺

奈良市の中心部に当たる近鉄奈良駅横の高天の交差点を、鴻池運動場の方に向かって、数分北へ歩くと、道路辺に「茶道発祥地」と刻まれた石碑（図7）がある。この交差点を西に入ると、すぐに「珠光旧跡」を示す大きな石碑が見え、称名寺の山門の前に出る。（図8、9）。

本シリーズの第一回に紹介した古市澄胤に茶の湯を伝授した、村田珠光が在籍したとされるために、このような標識が立てられたのである。珠光は、室町中期に、一休禅師に参禅し、茶と禅の到達点は同じと教えられ、「茶禅一味」の侘び茶を創出したとされている。



図7 茶道発祥の地石碑



図8 称名寺山門と珠光旧跡の石碑

始めのうちは、実在の人物かどうかを疑われていたが、現在は、彼とその後継者が京都の下京において、茶の湯活動を行っていたと考えられており、16世紀の初頭に没したとされる。珠光が本当にこの寺の関係者であったという直接的な証拠はないが、古くから言い伝えられてきたことと、古市澄胤や『松屋会記』^{注9)}に見られる利休の行動などからも、珠光の実在が裏付けられ、単なる伝承ではないと考えられる。

3. おわりに

前稿に続けて、本学近辺にある茶業や茶道に関する事跡として西大寺、元興寺、称名寺について紹介した。奈良県下には他にも多くの茶業や茶道に関する事跡があるので、引き続き紹介していきたい。



図 9 称名寺付近

注釈

- 注 1) 前稿とは、寺田孝重：「奈良佐保短期大学の近辺に存在する茶関係の史跡について(1)」、『奈良佐保短期大学研究紀要』, 20, pp.95-98 (2012) 及び寺田孝重：「奈良佐保短期大学の近辺に存在する茶関係の史跡について(2)」、『奈良佐保短期大学研究紀要』, 21, pp.73-82 (2013) である。
- 注 2) 平安後期から明治初期にかけて用いられた初等教科書の総称。単に「往来」ともいう。往来とは最初、往復一対の手紙文をいくつも集めて編まれた形式に由来する名称であったが、近世ではおよそ初等教科書として用いられるものをすべて往来物とよぶようになった。平安後期から室町時代にかけての往来を「古往来」と総称する。手紙文とそれについての詳細な解説とを交互に配列して学習の便を図ったのを『庭訓往来』と呼ぶ。
- 注 3) 仏教の宗派。中国では十三宗の一、日本では奈良時代の南都六宗の一つ。律とは毘奈耶(サンスクリット語ビナヤ *vinaya* の音訳)の漢訳で、比丘・比丘尼の守るべき規範のことである。出家者の教団における規定の集成書を律蔵といい、インドから中国へ伝えられた。
- 注 4) 奈良西大寺の叡尊が、弘長2年(1262)の2月から8月にかけて鎌倉に下向した際の活動を、弟子の性海が綴った記録。これより先、金沢実時は見阿や叡尊の弟子の定舜を使者として叡尊に東国布教を勧めていたが、叡尊はこれを応諾して鎌倉に下向。北条時頼や実時ははじめとする御家人の帰依を得ると同時に、弟子の盛遍、忍性、頼玄らをして鎌倉の貧民に食を施した。
- 注 5) 西大寺中興といわれる叡尊が暦仁2年(1239)正月、菩薩流の年始修法を行い、その結願の日に鎮守神である八幡宮に献茶をし、その余服を衆僧に喫茶せしめたのが始まりといわれる。当初は直会の行事として寺内だけで行われていたが、室町時代に入ると庶民への施茶へ拡大していったものと考えられる。現在は茶碗をはじめ、釜も茶筌もすべて大型であるが、もちろん当初のままではない。
- 注 6) 小物成とは江戸期の付加税の名称。特産物などにかかけられた。

- 注7) 興福寺大乘院第18世門跡經覚の日記. 『安位寺殿御自記』ともいう. 日次記65冊と、別記16冊の自筆本が国立公文書館に所蔵されている. 日次記は欠失部分もあるが、応永22年(1415)から文明4年(1472)にわたっている.
- 注8) 奈良興福寺の門跡寺院大乘院の門主、尋尊の日記. 15世紀半ばから16世紀初頭まで半世紀以上にわたる日記で、応仁の乱をはさむ室町後期の政治・経済・世情・風俗など様々なことが窺える. また、この日記は不用となった手紙等の文書の裏に書かれているため、日記の裏に別の文書(いわゆる紙背文書)が見える場合がすくなくない. 国立国会図書館近代デジタルライブラリ <http://kindai.ndl.go.jp/>にて、翻刻されたものが閲覧できる.
- 注9) 現存する最古の茶会記の一つ. 奈良の塗師で松屋家の久政、久好、久重3代にわたる他会記の集成書. 現存する流布本は江戸中期の転写本であり、書名も原書のままとはいえず、原型を正しく伝えているとは言えない. 構成は、天文2年(1533)～慶長元年(1596)の久政他会記、天正14年(1586)～寛永3年(1626)の久好他会記、慶長9年(1604)～慶安3年(1650)の久重他会記からなる膨大な茶会記録が収められており、茶道成立期の様子を知る上で最も貴重な資料の一つとなっている. 全文は『茶道古典全集9巻』淡交社(1957)或いは『四大茶会記(茶の湯の古典3)』熊倉功夫校訂訳注 世界文化社(1984)に掲載されている.

引用・参考文献

- 1) 東京大学文学部・奈良国立博物館編：『西大寺古絵図は語る 古代・中世の奈良』、奈良国立博物館、p.53 (2002)
- 2) 茶道資料館編：『鎌倉時代の喫茶文化：平成20年秋季特別展』、茶道資料館、p.62 (2008)
- 3) 茶道資料館編：『鎌倉時代の喫茶文化：平成20年秋季特別展』、茶道資料館、p.80 (2008)
- 4) 岩城隆利：『元興寺の歴史』、吉川弘文館(1999)
- 5) 経覚著、高橋隆三校訂：『経覚私要抄 第1-9(史料纂集[古記録編] [17], [28], [42], [54], 72, 133, 150, 163, 167)』、続群書類従完成会(1971)
- 6) 尋尊著、辻善之助編『大乘院寺社雑事記. 第1-12巻』、三教書院(1936)
- 7) 寺田孝重：『奈良県における茶業発達の研究』、1995
- 8) Yahoo Japan：Yahoo!Japan 地図、<http://map.yahoo.co.jp/> (2014.11.30)
- 9) 日本大百科全書、Japan knowledge、<http://www.jkn21.com/> (2014.11.30)